

学校栄養職員の職務実態・意識に関する調査研究

A Research on the work of school nutrition personnel

藤原文雄

Fumio FUJIWARA

（平成17年9月30日受理）

はじめに

1. 学校栄養職員の職業選択動機とリアリティー・ショック

（1）職業選択動機

（2）リアリティー・ショック

2. 学校栄養職員の離職の危機動機

3. 学校栄養職員のやりがいと悩み

（1）やりがい

（2）悩み

4. 学校栄養職員が教育活動を行う上での課題

終わりに

はじめに

本報告は、筆者が平成15年8月から9月にかけて静岡県内の学校栄養職員を対象に行ったアンケート調査の結果である。

今日、教育政策上、学校栄養職員はこれまでにない大きな関心を寄せられていると言える。指摘するまでもなく、食の教育の充実の流れにおける栄養教諭の創設にかかわって注目が寄せられている。簡単に栄養教諭創設までの経緯を確認しておこう。

学校栄養職員に対する関心の高まりの起点となったのは平成9年9月22日の保健体育審議会答申『生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について』であった。この答申では学校における食に関する指導の重要性と、その充実を図るために学校栄養職員の積極的な参画を提唱するとともに、新たな免許制度の導入を含め、学校栄養職員の資質向上策の検討の必要性を示唆した⁽¹⁾。この答申を受けて旧文部省は、「食に関する指導の充実について」と題する通知を平成10年6月12日に出したが、そこでは各学校の裁量で学校栄養職員が特別非常勤講師として、児童・生徒の食の指導にあたるなど工夫をすることが示された⁽²⁾。

この後、平成13年7月5日の文部科学省の食に関する指導の充実のための取組体制の整備に関する調査協力者会議の『食に関する指導の充実のための取組体制の整備について（第一次報告書）』を経て、平成14年9月の中央教育審議会答申『子どもの体力向上のための総合的な方策について』では、食に関す

る指導の重要性に鑑み、学校における指導体制を整備する観点から、「栄養教諭」制度の創設など学校栄養職員にかかる新たな制度の創設を検討する必要が提言された。それらの提言を踏まえて、中央教育審議会スポーツ・青少年分科会のもとに食に関する指導体制部会を設置し、具体的な審議が重ねられ、平成16年1月に『食に関する指導体制の整備について』が出され、栄養教諭制度の創設により、学校における食の指導の充実を図るという方向性が提言された。この答申を受けて、栄養教諭の創設に関わる学校教育法等の改正が行われ、平成16年5月21日に公布、平成17年4月1日より施行された。

創設された栄養教諭の設置は地方公共団体や設置者の判断による任意設置であり、公立小中学校の栄養教諭は県費負担教職員であることから都道府県教育委員会の判断によって配置される。栄養教諭の職務として、「児童の栄養に関する指導及び管理をつかさどる」(小学校以外の学校については準用規定)と規定され、より具体的には「栄養に関する指導及び管理のうち、指導には、児童生徒に対する栄養に関する個別的な相談指導や、学級担任、教科担任等と連携して関連教科や特別活動等において食に関する指導を行うこと、食に関する指導に係る全体的な計画の策定等への参画などが含まれること。また、管理については、学校給食を教材として活用することを前提とした給食管理、児童生徒の栄養状態等の把握、食に関する社会的問題等に関する情報の把握などが含まれること」とされている⁽³⁾。

こうした栄養教諭の創設については、今日においてもその是非については「静かに」議論が続けられている。敢えて「静かに」と表現したのは、今般の栄養教諭の導入が学校教育界の議論の積み上げによる合意によって導入されたというよりも、国民全体の食生活を起因とする健康問題の深刻化と、それに伴う社会保障費の増加を心配する政治主導で「はじめに栄養教諭ありき」⁽⁴⁾という形で制度が導入されたという経緯から、殊に教育委員会など行政サイドとしては非常に議論しづらい雰囲気とならざるを得ないと言う事情を含んでのことである。とはいっても、これから、各都道府県において新たな税金支出も伴う栄養教諭の配置が具体化する中で、既存の学校栄養職員の配置も未整備であるという条件のもと、家庭科教員などその配置により影響を受け得る関係者も巻き込んで、栄養教諭の配置の是非や協力体制の在り方について否応なしに熱い議論がなされていく可能性もある。

栄養教諭の制度設計を担当した中教審スポーツ・青少年分科会に設けられた「食に関する指導体制部会」の部会長を引き受けた浅見俊雄は、この栄養教諭創設は「すんなりまとまる」と思ってその役職を引き受けたものの「そうは単純にかなかった」と振り返っている。浅見自身の整理に従えば、創設までの議論の論点は①食の中心は家庭にあり、学校が中心にかかわるものではないという意見、②栄養教諭を新設しなくても、今の学校栄養職員を活用した食の指導体制を充実すれば、目的が達成されるのではないかという疑問、③今でも忙しい学校栄養職員にさらに負担がかかるのではないかという意見、などであったという⁽⁵⁾。こうした論点は栄養教諭の制度化をめぐる繰り返しの論じられることだろう。

以上のような学校栄養職員、栄養教諭に対する関心の高まりに比較して、これまで学校経営研究においては学校栄養職員についてほとんど注目が寄せられてこなかった。かつて、1980年に『教育をになう人びと—学校教職員と現代民主主義—』と題する本を著した芝田進午は「教師以外の教育労働者、すなわち学校職員の役割については、あまり注目されてこなかった」⁽⁶⁾と述べたが、今日においてもそうした傾向に変わりはない。

学校経営という営みの骨子は、①人・物・金・情報・知識などの経営資源を調達する(学校に参加してもらい、やる気をもって仕事をしてもらい、力量を高めてもらう)ことと、②それらを一定の方向に向けて調整する(つなげる)ことである⁽⁷⁾。このように、学校経営という営みを理解すれば、学校栄養職員をはじめ学校に係わる全ての教職員の実態や意識を理解することは、学校経営あるいはそれを支える学校経営研究のスタートである⁽⁸⁾。学校職員の全ての職務内容や専門性について理解し、その上で教職員一人

ひとりの人間性を尊重し、持ち味や思いを理解することは学校経営の責任者である校長職の基本的責務である。後に述べるように、そうした基本的責務を全うしている校長も存在するものの、残念ながら全ての校長が経営者としての務めを全うしていないばかりか、必ずしも意図していないかもしれないが自らの言葉により教職員の勤労意欲を低下させている校長が存在することも事実である。学校栄養職員の職務については、1986年に旧文部省は各学校等が学校栄養職員の具体的な職務内容を定める場合の参考として示した『学校栄養職員の職務内容について（通知）』⁹⁾があるが、その存在もどれほど認知されているだろうか。また、栄養教諭の制度化の是非についても、現在の学校栄養職員の職務実態・意識についての調査に基づいて行われるべきではないだろうか。しかし、残念ながら、これまでの学校経営研究においては学校栄養職員についての研究はほとんど見あたらない。

本調査では学校栄養職員の職務実態・意識について調査することとした。筆者がこの調査で明らかにしたかったことは、(1)学校栄養職員にはどのような人がその職に就いており、実際に職に就いた際にどのような実感を抱いたのか（職業選択動機とリアリティー・ショック）、(2)学校栄養職員が職を辞めようと思う場合の理由は何か（学校栄養職員の離職の危機動機）、(3)学校栄養職員のやりがいと悩みについて（学校栄養職員のやりがいと悩み）、(4)学校栄養職員が教育活動を行う上での課題とは何か（学校栄養職員が教育活動を行う上での課題）等である。

調査は、2005年8月11日に行われた、学校栄養職員を対象とした認定講習で切手を貼った封筒に入れたアンケート用紙を配布し、記入後封をして9月15日までに大学まで返送してくれるよう依頼した。99名を対象に配布し、86名の協力を得ることができた。調査協力者の属性は【表1】以下の通りである。

【表1】

- | | | |
|-------------------|------------------|------------|
| 1. 学校栄養職員経験年数 | | |
| 1. 5年以内＝3名 | 2. 6年～10年以内＝17名 | |
| 3. 11年～20年以内＝24名 | 4. 21年～30年以内＝29名 | |
| 5. 31年以上＝13名 | | |
| 2. 最終学歴 | | |
| 1. 大学＝26名 | 2. 短大＝55名 | 3. 専門学校＝5名 |
| 4. その他＝0名 | | |
| 3. 他の職業の経験はありますか？ | | |
| 1. はい＝28名 | 2. いいえ＝55名 | |
| 4. 性別 | | |
| 1. 男＝3名 | 2. 女＝83名 | |
| 5. 年齢 | | |
| 1. 20歳代＝8名 | 2. 30歳代＝29名 | |
| 3. 40歳代＝24名 | 4. 50歳代～＝25名 | |
| 6. 勤務場所 | | |
| 1. 学校＝46名 | 2. 共同調理場＝38名 | |

1. 学校栄養職員の職業選択動機とリアリティー・ショック

(1) 職業選択動機

職業の特徴をあらわす一つの指標として、その職業の選択動機がある。「あなたが、学校栄養職員という職業を選択した理由について、下記の空欄に記入して下さい」という質問を行った。その回答を受け、筆者が一番印象深かったことは以下のように「栄養士としては働きたかったが、本当は病院や保健所の栄養士として働きたかった」、「栄養士としては働きたかったが、必ずしも学校栄養職員には限定していなかった」という回答が相当数見られたということであった。また、市町村によっては市町村職員として採用され、学校給食をはじめ保育所給食や保健センター等との間で人事異動があり、「現在たまたま学校栄養職員として勤務している」という回答もあった。こうした回答以外にも、「とにかく栄養士の資格を生かした仕事をしたい」という「栄養士志向」は多くの回答者に共通する志向であった。

学校給食の栄養を管理する者は、学校給食法第五条の三の規定により、「義務教育諸学校又は共同調理場において学校給食の栄養に関する専門的事項をつかさどる職員は、教育職員免許法（昭和二十四年法律第百四十七号）第四条第二項に規定する栄養教諭の免許状を有する者又は栄養士法（昭和二十二年法律第二百四十五号）第二条第一項の規定による栄養士の免許を有する者で学校給食の実施に必要な知識若しくは経験を有するものでなければならない」と定められている。つまり、栄養教諭又は学校栄養職員でなければならない。学校栄養職員になる上での前提条件である栄養士資格は栄養士法により規定されているが毎年約2万人の栄養士が誕生し、実際栄養士につくのは約4割だという⁽¹⁰⁾。勉強して手に入れた資格であり、しかも供給過剰という条件に、学校給食に限定せず保育所や病院などを一括して採用し、採用した後振り分けるという県や市町村の採用試験の在り方があいまって、「栄養士としては働きたかったが、本当は病院や保健所の栄養士として働きたかった」、「栄養士としては働きたかったが、必ずしも学校栄養職員には限定していなかった」という回答が相当数見受けられたものと考えられる。

（栄養士としては働きたかったが、本当は病院や保健所の栄養士として働きたかった）

- ・ 栄養士としての職業を志していたが、始めは学校に勤務することを望んではいなかった。しかし、県栄養士として学校に配属されると、仕事をしていくうちに学校に勤める栄養士の重要性（子供の現状を知り、食育の大切さを知った）を理解し、幼い時から継続的に食に対する指導を行っていかねばわが国の将来は危ぶまれると感じた。疾病にかかる以前に生活習慣を見直すことは学童期から指導しなければならない。結果的に学校栄養職員として仕事ができていることに感謝している。（30歳代）
- ・ 大学の専攻は、病院栄養士の養成コースであったため、病院栄養士を目指していた。県立病院へ病院実習に行ったとき、「こここそ、私の目指しているところだ!」と思い受験（公務員・県職・栄養士）したが、採用されたのが学校だった。しかし実際学校に就職し、現在はやりがいのある良い仕事だと思っています。（20歳代）

（栄養士としては働きたかったが、必ずしも学校栄養職員には限定していなかった）

- ・ 栄養士の資格を生かした仕事がしたいと思ったから。学校限定では考えてなかったが、治療としての食事よりもコミュニケーションとしての食事の方に興味があったから。（30歳代）
- ・ 県の栄養士の試験を受けて配属先がたまたま学校だったというのが正直なところであるが子どもに関わる職業につきたいとも思っていた。（40歳代）

もちろん、「栄養士としては働きたかったが、本当は病院や保健所の栄養士として働きたかった」、「栄養

士としては働きたかったが、必ずしも学校栄養職員には限定していなかった」という「栄養士志向」の人たちだけでなく、学校栄養職員に是非なりたかったという「学校栄養職員志向」の人たちも多く存在する。そうした「学校栄養職員志向」の人たちの志望動機を更に詳しく見ていくと「学校給食に強い思い入れがあったから」、「教師、学校、子どもが好きだから」、「学生の時の栄養士実習での経験から」などの指摘が多かった。その他には「未来ある子どもの栄養指導をしたかった」、「休日が安定しているから」、「料理をするのが好きだったから」、「人と関わり合う仕事がしたかったから」、「丁度学校栄養職員が配置される時期⁽¹¹⁾だったから」、「公務員として安定しているから」、「女性として働ける限られた職業であったから」、「自宅から通えると考えたから」などの指摘があった。

(学校給食に強い思い入れがあったから)

- ・ 小学校時代自校給食で、給食当番をやるのがとても楽しみでした。給食室には大きなお釜があり、不思議な機械があり、それが返却の窓口から少しだけ見える、自分にとってとても興味深い場所でした。学生時代、大人が学校給食を語る時みんななつかしそうに話すと感じていました。牛乳が飲めなかったこと、くじらの肉が出たこと、笑顔でなつかしそうに話します。病院給食をなつかしく話す人はいるでしょうか。社員食堂（事業所給食）をなつかしそうに話す人はいるでしょうか。大人になった時なつかしんでもらえる学校給食にたずさわれる仕事をしたいと思い学校栄養職員という職業を選択しました。(30 歳代)
- ・ 小さい頃から好き嫌いがあり、小学校の給食の時間はとても苦痛でした。しかし短大のとき、訪問先の小学校で食べた麻婆豆腐が今でも忘れられないくらいおいしく、子供たちももともと大好きでしたが、とてもかわいかったので、給食が苦手な子も楽しくなるような、給食の時間にしてあげたいと思いました。(40 歳代)

(教師、学校、子どもが好きだから)

- ・ 一番なりたかった職業は、家庭科の先生でした。しかし短大で教職と栄養士の両方を考えることは、無理ではないかということで、教職をあきらめました。そのため就職を考えるときには、それでも学校というところに夢を捨てきれず、学校栄養士を選びました。(50 歳代)
- ・ 料理を作ることが好きだったこと、母親が学校給食の調理員をしていて身近な存在だったこと。子どもが好きだったので子どもの近くで仕事をしたいと思ったが、教師は向いていないと思った（教師になった自分の良いイメージがいただけなかった）ので子どもの近くにいられる仕事として選んだ。(40 歳代)

(学生の時の栄養士実習での経験から)

- ・ 栄養士免許取得のため、事業所、保健所、病院、学校へ一週間ずつ実習にいった際、小学校の子ども達がかわいく職場も楽しそうだったため、自分も卒業の際には学校栄養職員になりたいと思いました。(40 歳代)
- ・ 実習で単独調理場の小学校へ行き、その栄養士さんがとてもステキだったので。すごく生き生きと仕事をされていた姿に感動しました。(30 歳代)
- ・ 学生のときの学外実習でいろいろな施設での栄養士の仕事を経験したが、その中で学校栄養職員が一番やりがいのある仕事と感じました。医療に携わる栄養士もいますが、病気にならないための、予防のための指導や教育ができる立場と考え選択しました。(30 歳代)

(2) リアリティー・ショック

どの職業においても、入職後のリアリティー・ショックは大きいものがあり、ショックを受けた具体的な内容は、その職業の性質を特徴づけているといえる。教師の場合には、「仕事量の多さ」、「子どもの能力差の大きさ」、「管理・統制のきつさ」、そしてそれにも関わらず「世間の目の冷たさ」などがショックの具体的な内容として指摘されることが多いという特徴を有している⁽¹²⁾。われわれは、「あなたが、学校栄養職員になった直後から5年間くらいの間に、実際になってみて予想外であったこと、予想以上であったことの中で、最も印象的だったことについて、下記の空欄に記入してください」という質問を行った。また、われわれは、この調査で「給食のある日の典型的なあなたの出勤から退庁までの一日がわかるように日誌風に以下の空欄に記入してください」という設問も設けた。これから論じる学校栄養職員の職務を理解する上で参考になると思われるので、以下に一例（学校に勤務しているケース）を掲載する。

□□□ 学校栄養職員の日 □□□

6:55～10:30

二軒の八百屋さんから納入しています。月の前半の八百屋さんは7:40分に、後半は6:55に野菜が届きます。地元の農家からの野菜・果物もこの間に届きます。パン・牛乳・その他の物資も届きます。給食物資納入時には、すべて検収簿を用い、納入業者・時間・産地・品温・品質・鮮度・包装状態等を確認し記入します。検収の時間の他には、学校との連絡や、事務作業をしています。

10:30～12:10

当日のタイムスケジュールを見て、難しいところや、初めての献立、調理が大変な時に調理室に入り、調理作業や、調理をします。給食ができ次第、検食（校長先生と栄養士が、児童が給食を食べる前に、味・量・匂い等を確認しながら食べます）をします。

12:10～12:30

児童が、クラスごと給食を取りに来るので、給食委員会の子どもたちにも手伝ってもらい、火傷等危なくないように注意しながら渡します。

12:30～12:50

給食がすべて運ばれた後、片づけの準備をし、放送室に行き「今日の献立について」や「栄養指導」の話をします。この後、クラスを周り10分くらいの栄養指導をし、好き嫌いの激しい子や、肥満度の高い子の様子を見て個人的に指導をします。

12:50～13:30

クラスごと返しに来るので、食べるクラス、残すクラス、何が残っているかを確認します。個人的に返しにきた子どもには、一言栄養指導します。

13:30～16:45

献立作成、発注、アレルギー対応、地元の野菜・果物の連絡調整、献立一覧表（家庭用・クラス用）の作成および起案・印刷、給食日誌の作成、給食費の支払い、消耗品の支払い、給食機械・器具及び消耗品の発注・修理依頼等、栄養指導資料の作成、調査・報告等の提出文書の作成、栄養士会議、職員会議、連絡調整などを行っています。

* このうちの、14:30～15:00は、調理員と翌日の献立について、献立の作り方・材料の切り方、使用する釜と動線、調理担当者、アレルギー除去食・代替食の担当者、調理を開始・終了する時間等を決め

る打ち合わせをして、タイムスケジュールを仕上げます。

その結果として、指摘が多かったものは「仕事を教えてくれたり、相談に乗ってくれたりする人が職場にいなかったこと」、「働く場所・上司の考え方により、職務内容や仕事量が違うこと」、「調理員と栄養士との仕事の区別が明確でなかったこと」、「調理員・上司との関係の難しさ」、「立場が微妙で孤独感を感じる」、「教師との関係、学校栄養職員の地位が低いこと」などが指摘された。栄養士という資格を有する学校栄養職員が、それぞれの置かれた状況のもとで専門性を発揮することを阻害されたり、立場の曖昧さに一人で耐えている状態、あるいはそうした状況のもとで自らの位置を確かなものにしたり、専門性を発揮しようと努力している学校栄養職員の姿が鮮明に浮き彫りとなった。筆者はこの研究を始める前は、学校栄養職員という仕事は料理に関する楽しいイメージを抱いていたがかなり違うということがわかった。このリアリティー・ショックに関する質問項目で浮き彫りになった学校栄養職員のイメージは、やや乱暴に言えば、「学校給食に関しては知識や力量のない上司のもとで働く中間管理職」という精神的にも体力的にもタフなイメージへと転換した⁽¹³⁾。学校栄養職員は以上のようなリアリティー・ショックになんらかの形で適応するための技を有しているため職業生活が続けられるわけであるが、学校栄養職員が気持ちよく専門性を発揮できるようにする上では、以上のような状態が改善される必要があるだろう。

上記のような指摘のほかに、「責任の重さを実感した」、「同僚の学校栄養職員との関係の難しさ」、「上司・校長が学校給食について知識がないこと」、「大学・短大で学んだことが役に立たなかったこと」、「子どもとの関わりが少なかったこと」、「栄養指導がなく給食のみが仕事であったこと」、「配属後すぐに仕事をしなければならなかったこと」、「子どもたちに食の指導を行うこと」、「夏休みの勤務が少なかったこと」、「経理についての専門性が必要であると思ったこと」、「県費負担に変わったこと」、「衛生管理が厳しかったこと」、「『縁の下力もち』的な存在だと思った」、「実習で経験した職場と現実の職場が違ったこと」、「仕事量が多かったこと」、「子どもとのふれあいの楽しさ」などが指摘された。

(仕事を教えてくれたり、相談に乗ってくれたりする人が職場にいなかったこと)

- ・ 学校に一人配置であることは承知していたが事務に関することは研修する機会をもうけていただけていたと思っていたら何も誰も教えてくれず、最初途方にくれた記憶があります。(40 歳代)
- ・ 一人職であり、前任者も忙しくてあまり仕事内容を教えてもらえなかったこと。校内で相談できる人がいなかった。給食員とのかかわり方。献立の変更は常でした。前任者と同じ献立内容でも、「出来ない」といわれました。校内で教えてくれる人も、守ってくれる人もいなかった。(先生方は冷たかったです) P T Aでの飲み会がとてつらかったです。(30 歳代)

(働く場所・上司の考え方により、職務内容や仕事量が違うこと)

- ・ 働く場所によって仕事量が大きく違うこと。センターでは子どもとの距離が遠く学校の臭いがしないこと。立場（特に学校での）があいまいなこと。給食時間の指導や今の子どもの食のみだれに大きく差（温度差も含め）があること。(20 歳代)
- ・ 学校栄養職員の職務が所属校あるいは勤務先の上司の考え方によって全く異なってくるということ。食育の指導への校長・センター長の理解度もまちまちなので、この学校では指導できたがこの学校では指導ができないという事態も出てくる。また、調理場から外に出やすいか出にくいかの差も大きい。(30 歳代)
- ・ 所属学校（市が変わること）によって、栄養職員の立場や仕事（1日の流れ、子供たちとの係わり合

い) がまったく違うこと。ある学校では、調理員の一人。ある学校では職員（教諭）の一人。子供たちから見て、先生であって先生でない。(20 歳代)

(調理員と栄養士との仕事の区別が明確でなかったこと)

- ・ 単独校での勤務でしたが、調理業務も当然栄養士の仕事として調理員さんたちに思われていたこと。調理員さんが都合で仕事を休めばその穴埋めを栄養士が行い、栄養士本来の仕事は調理員さんの仕事が済んでからという時代でした。今では、これは私の仕事ではないのよ。でも少しお手伝いするねと言えるのですが…。(40 歳代)
- ・ 調理員一人当たりの食数が 300 食近くあったので、栄養士が午前中調理を手伝うのは当たり前という時代でした。今は食事内容が多様化したとはいえ、調理員一人当たり 150 食前後と改善され、栄養士は調理指導に入る程度となりました。(50 歳代)

(調理員・上司との関係の難しさ)

- ・ 調理師さんや上司（行政職）との人間関係が予想以上に大変でした。それまで民間で働いていましたので「なぜこんなに働かないのか、働くことを嫌がるのだろうか」と思いました。子どもは予想以上のかわいさでした。それまでは病院と老人でしたので。(30 歳代)
- ・ 予想外であったことは、自分の親と同世代の調理師の方に指導したりすることが要求され、経験が少ないなか対応に苦慮した。人間関係が実務の仕事以上に難しかった。周囲にとっても理解がある先生方が多く助けられた。(30 歳代)
- ・ 栄養士の仕事というとすぐに「カロリー計算」と言われるが、栄養管理や献立作成を行う前に実際の調理現場の調理工程や作業動線を把握し、それを献立作成に生かしていく必要があるということがわかった。一人職であるのですべてが自分の身に降りかかってくる。自分が動かなければ何もまわっていかないとわかった。(40 歳代)
- ・ 子どもたちへの指導が主な仕事だと思っていたら、実際は調理員と同じように午前中調理現場に入り調理員のように作業することを調理員から望まれ、そうしないと人間関係がうまくいかないことにギャップを感じた。本来の職務以外のことをして本来すべきことがうまくできないこと、調理員の強さ、全校配置でないため職務が他の教職員に理解されにくいことなど。(30 歳代)

(立場が微妙で孤独感を感じること)

- ・ 一人職のため、所属と勤務先が異なり、立場が微妙で大変でした。校長と調理場長の意見が違うとどちらを立てればよいのか困りました。(20 歳代)
- ・ 学校の職員なのに、所属の学校での認知度が低いこと。(センターの人だと思っている) (30 歳代)
- ・ 給食管理のすべてが自分にかかっていることと、自分の職場が学校・センターのどちらとも関係が複雑で、わかりにくいということ。(40 歳代)

(教師との関係、学校栄養職員の地位が低いこと)

- ・ 教師は他の職業のことをあまりに知らないんだ！学校は教師にあらず、人は人にあらずなんだ！小学校の先生は、お山の大将みたいだ。(40 歳代)
- ・ 学校栄養職員の地位（発言力や指導・教育していく場合の力）が、学校の中でとても低かったこと。（食に関する指導が軽視されていたこと）(30 歳代)

2. 学校栄養職員の離職の危機動機

どのような職業についている人であれ、その職業人生の中でその職を辞めようと思うに至った離職の危機を一度や二度は経験しているだろう。この離職の危機を引き起こした動機を分析することにより、その職の特徴をつかむことが可能である。われわれは、「学校栄養職員の仕事をやめようと思ったことはありますか?」という質問を行った。その結果、86名中、53名(61.6%)の人が「はい」と回答した。その人たちに、更に「経験年数何年頃の事でその理由は何でしたか?下記の空欄にご記入ください」という質問を行った。

その結果指摘が多かったものとして、「家庭・出産・子育てと仕事の両立」、「調理員との人間関係」、「上司との人間関係」、「仕事の多忙さ」、「孤独感・支援体制の欠如」、「責任の重さ」などが挙げられる。そのほかに、離職の危機動機として、「セクハラ・パワハラ」、「立場のあいまいさ」、「給料の安さ」、「給食や食指導に対する周りの無理解」などが指摘された。

既にリアリティー・ショックについて論じた際に述べたことであるが、学校栄養職員の仕事は、学校給食についてあまり知識や力量がないセンター長・校長のもとで、実際にそういう職制にあるわけではないが、あたかも中間管理職のように、自らの立てた献立の調理をする多数のしかも新採時には自分より年上の調理員の協力を得て、時間までに仕上げなければならない。その上、支援体制が欠如している中で、仕事の範囲が広く多忙であり、しかも自分が本務ではないと理解している調理も担当せざるを得ない状況の中で、責任感を重く感じつつ仕事をしているという学校栄養職員の姿が、ここでの離職の危機動機に関する質問でも窺われる結果となった。

本稿では、紙幅の関係で触れないが、われわれは今回の調査で職業上の転機についても質問した。長い職業人生の中では、職業についての考え方が大きく変わる転機を経験することがある。こうした転機に注目することにより、職務遂行上の変化とそれを生み出した要因を探ることができる⁽¹⁴⁾。われわれは、「学校栄養職員という職業についてのあなたの考え方が大きく変わった時期がありますか?」という質問を行った。その結果、86名中、60名(69.8%)の人が「はい」と回答した。その人たちに、更に「考え方が大きく変わる上で、大きな影響力を持った人や出来事、耳にした言葉、出会い、きっかけなどについて下記の空欄に自由に記述してください」という質問を行った。その回答の中で「O157の事件があり、平成8年より衛生管理が厳しくなりました。おいしさをそれなりに追求していました。調理の制限が増えました。今までのメニューを出せなくて悩みましたが、仲良し学級の子供たちの、おいしい給食をありがたいという言葉や、子供たちのつぶやき、先生方の励まし、調理員さんの努力で乗り切りました。周りの人々との人間関係の中で、喜びを見つけて立ち直りました」といったO157の事件及びその後の衛生管理の強化について複数言及された。この記述からも窺えるように、衛生管理と責任・プレッシャーに加えて、調理員の協力を得てきちんと給食を定時に出し続けなければならないという責任・プレッシャー、給食に関する会計を一手に担うという責任・プレッシャーは相当に重いものであるに違いない。また、女性が多い職ということもあり、「家庭・出産・子育てと仕事の両立」により学校栄養職員を辞めようと思ったことがあるという指摘も多かった。

(家庭・出産・子育てと仕事の両立)

- ・妊娠したときに、調理作業や洗浄作業が以前のようにできなくなり、献立作成やたより作成等栄養士本来の業務を優先的にやらざるを得なかったとき、調理主任が「調理現場にとって不自由なので早く代わりの栄養士に切り替えてほしい」と管理職に求め、結果二ヶ月早く産前休をとらざるを得ない状況に追い込まれたとき。(3年目頃)

- ・ 子供が生まれたとき。当時栄養職員には育休がなかったため、産後8週間で復帰しました。母乳をほしがるときにあげられなかったのが、つらかったです。(5年目頃)
- ・ 妊娠、出産をし、子育てしながらの仕事に復帰したところ、仕事も子育ても家事も中途半端でうまくいかない感じがして子どもにも家庭にも、学校の子どもたちにも悪いなという気持ちで、やめようかと迷いました。自分に余裕がなかったのと、すべて完璧にこなしたいとのズレでとても悩みました。(5～6年目頃)

(調理員との人間関係)

- ・ 調理師さんとの人間関係。若い栄養士の言うことは何一つ受け入れてもらえません。朝礼で献立の説明を始めると全員一斉に背を向けられました。登校拒否寸前でした。(2年目頃)
- ・ 午前中、調理、午後そうじ、自分の仕事は5時から。子どもたちのためにと考えた献立も調理室から却下。私は何の仕事をしているんだろうと思ったとき。(1～3年目頃)
- ・ 調理員さんは自分の親より年上の方が多く、その中で指導的な立場にいきなりなり、大変でした。(1～2年目頃)

(上司との人間関係)

- ・ 理解のない上司がいたから(2～3年目頃)
- ・ 上司(市・町の施設の長)との人間関係。一例にすぎないが、「時間外勤務手当」とよばれる手当を県の事務職員、栄養職員はもらっているのだが、書類に施設の長の印が毎月必要。印をもらうとき露骨にいやみを言われたり、もらえなかったりした。

(仕事の多忙さ)

- ・ 毎月の献立作成だけで目がまわるようだった。当時は栄養計算も発注も手計算でした。(正確にはやめようというより続くかなあと不安だった。入って夏休みころまで)
- ・ 体力の衰えを感じ始め毎日の業務プラス指導も多く、多忙になりはじめ仕事のペースが微妙に変わってきた頃。家庭的な問題もあり、すこし考えることがあった。(20年目頃)
- ・ 市の合併に伴い仕事が複雑化し出張回数が増え、衛生管理、給食業務、食指導等仕事量が今まで以上に増えました。(30年目頃)
- ・ 栄養士として採用されたのに、仕事の内容は調理業務や後片付け、調理員に関する雑用がほとんどで、献立作成や給食事務は勤務時間外にやらざるを得ない毎日を送っていたので。(1年目頃)

(孤独感・支援体制の欠如)

- ・ 年数の長い給食長との人間関係。(私とよりも、給食員同士)校長に相談することがわからなかった。他校の栄養士さんには「私も忙しい」といわれてから、連絡するのも嫌になったとき。書類を書くこと、献立作成、パソコン操作、自分で覚えるのに苦しんだとき。(1～3年目頃)
- ・ 一人職場で所長もいないなか、採用されて何もわからず、仕事面などで身近に支えて指導してくれる人がいないのに、自分の親くらいの年齢の調理員さん(調理員歴20年以上など)を指導したり、管理したりしなければならない立場に立たされてしまったことに、耐えられないと思ったから。(2～3年目頃)

(責任の重さ)

- ・ 衛生管理、栄養管理、食に関する指導をオールマイティーに、こなさなければいけないプレッシャーと、子育てとの両立で、自信を失いかけたとき。(10年目頃)
- ・ 当時学校勤務で栄養士も調理員の一人のように朝から調理に携わり、給食時にはクラスに食の指導に行き、午後は片付け作業で、栄養士としての仕事ができるのは15時～16時の1時間であった。やるべき仕事如山積みでやらなければ来月の給食が出せないし、という多忙とプレッシャーで辞めなくなったが、いい具合に子どもができ、育休がとれてリフレッシュできた。(5年目頃)
- ・ 給食費の運営が大変だったとき。その年度のお金をうまく予算内で使い切るように年度末には計算ばかりしています。この計算が違っていたらものすごくプレッシャーになりやめようかと何度も思ったことがありました。(4年目頃)

3. 学校栄養職員のやりがいと悩み

(1) やりがい

学校栄養職員はその仕事にやりがいを感じているのだろうか。また、どのようなことにやりがいを感じるのだろうか。われわれは、「あなたは、学校栄養職員という仕事にやりがいを感じていますか？」という質問を行った。その結果、86名中、80名(93.0%)の人が「はい」と回答した。その人たちに、更に「どのようなことにやりがいを感じられていますか？下記の空欄に自由にご記入ください」という質問を行った。「給食の味や内容が認められたとき」、「食に関する指導をしているとき」、「子どもが変化していることを実感したとき」、「単独校に勤務すること」、「子どもとのかかわり」、「調理員と協力できたとき」、「未来ある子どもの食や栄養に関わっていること」、「仕事に裁量があり、工夫ができること」、「責任の重さ」、「教職員から自分が認められたとき」などの指摘があった⁽¹⁵⁾。これまで論じてきたように、学校栄養職員の職務内容は働く場所・上司により一定ではないという性格を持っている。しかし、それを裏返せば「仕事に裁量があり、工夫ができること」につながり学校栄養職員のやりがいを生み出す要因にもなっていると言えよう。

(給食の味や内容が認められたとき)

- ・ 児童が献立のサンプルを見たときの歓声や「おいしそう」、後の「おいしかったよ。また作ってね。」の声を聞くと、報われたと喜びが湧き上がってきますが、何を出してもどう工夫してもまず残す。毎日少しでも食べることが出来ない児童を見ていると、むなしく悲しくなってしまいます。
- ・ 「おいしい給食だったよ」と子どもが笑顔で答えてくれたり、「またおいしく作ってね」「〇〇先生の給食とてもおいしいよ」と言ってくれた時はどんなに忙しくても心が豊かになります。また、明日もがんばろうという気持ちになります。食事等で「また話をききたい」と子どもが言ってきた時、やってよかったと感じました。

(食に関する指導をしているとき)

- ・ 給食の後の子どもたちの声、毎日目に見えて反応がわかる。最近授業へ出るようになり、私のひと言が子どもたちに影響を与える。こわい気もするが子どもがより身近になりやりがいを感じる。
- ・ 食育を行うことによって、自分を確かめられるような気がする。子供とのふれあいで心が豊かになるかな…。優しい気持ちがもてたり、何かを考えることで毎日生きてる感じがある。嫌な人、上司に自分を示すには、ここだという仕事で主張できる。

(子どもが変化していることを実感したとき)

- ・給食を食べる子供たちと作る側がお互いの顔が見えるという自校直営調理の良さを生かし、子供たちの食への関心が高まるような指導を実践して子供たちが変わってくれた時がんばって良かったなと感じます。
- ・給食の時間、子供たちが喜んで給食を食べているとき。偏食指導がうまくいったとき。授業のあと、子供たちの食行動に変化が見られ、指導の成果を感じられたとき。

(単独校に勤務すること)

- ・単独校に異動し全員の子どもたちが給食の指導をする人だと知っていること。
- ・単独校なので直接子供と触れ合える。どこのクラスでも給食を介して話ができて、子供たちが嬉しそうに食べている姿を見ることが出来るから。この子供達が大人になったとき、良い給食の思い出話が出来るといいなあと思っている。

(子どもとのかかわり)

- ・子どもから「今日の給食おいしかったよ〜」「〇〇が嫌いだったけど、食べれたよ」などと声をかけられたとき。
- ・自分の取り組みに対して成果を数字で見れるものばかりではないので、いつも迷いながらやっていますが…。「給食のおかげで苦手なものが食べられるようになったよ。」「朝食の話を聞いて、毎日朝食を食べるようになったら、風邪をひかなくなったよ。」といった子供の言葉や、変容を聞くと自分の思いが届いているなど実感しています。

(調理員と協力できたとき)

- ・調理員さんと協力して手のかかる、献立をおいしく作ることができた時。また子どもたちと関わる時。
- ・調理員、教職員の同意を得、協力しながら教育の一環という形でランチルーム給食、バイキング給食を実施できたこと。学力・スポーツ・生活習慣病予防等をテーマに指導を行った後、児童・生徒や保護者から実践し効果があがっている旨の報告を受けたとき。

(未来ある子どもの食や栄養に関わっていること)

- ・これからの未来を担う子どもたちに食べることの楽しさや大切さを伝えることができること。
- ・病人でなく健康で元気な子供たちが給食の対象であり、給食をおいしそうに喜んで食べてくれること。バイキング給食などは準備が大変だが、子供たちは本当に素直に喜んでくれる。とてもやりがいがあるし、疲れが吹き飛びます。

(仕事に裁量があり、工夫ができること)

- ・給食の献立を工夫したり、おいしいものを子供たちに提供できることに、やりがいを感じます。また子供たちにいろいろな方法で指導して、自分の願いが伝えられたと感じるときに、やりがいを感じます。
- ・日々調理された料理の残食を見て、味付け、切り方、料理の組み合わせを反省し、次回の調理に役立っています。自分なりに調理の仕方も工夫すると残食も減り、子供たちも食べてくれます。また子供たちから今日の料理「おいしかったよ」といわれたとき。子供たちのためにがんばるぞと思うので、子供の声が聞ける単独校に勤務したい。

- ・ 衛生管理では、より安全で効率のよい作業方法を考えること。栄養管理では本校の子どもの健康を考え基本量を守りつつオリジナルの献立を立てること。食に関する指導では子どもたちが自分自身で食べ物や健康について考えることができるよう指導すること。これらを自分なりに上手にすすめたいと考えるとき、やりがいを感じます。

(責任の重さ)

- ・ 責任の重さ、自分が立てた献立を具現化できること。苦勞してやれば成果や達成感も大きいこと。
- ・ 食に関心がある人もない人も、学校の中の人はずべて毎日給食を食べてくれており、それをととても楽しみにしてくれていること。自分の仕事（給食を作ること）に対する評価が、毎日必ず自分の目で（耳で）見ることができるという点で、厳しいがやりがいがある。また子供たちが少しでも、良い方向へ変容していく様子が伺えたときには、心から嬉しく「また、がんばろう！」という気持ちが湧いてくる。

(教職員から自分が認められたとき)

- ・ 学校の組織の中で自分の存在感、自分のいったことが認められたとき。（専門分野や授業、給食指導だけでなく毎日の中の些細なことでも）栄養職員の研修の代表、まとめに関わって成果をあげたとき。

(2) 悩み

われわれは「あなたがこれまで学校栄養職員という仕事を遂行する上で、直面された課題や苦勞された点、いやだと思ったこと等の内で最も印象的だったことについて下記の空欄に自由に書いて下さい」という質問を行った。「調理員との関係」、「学校での立場のあいまいさ」、「教職員の給食や食指導に関する関心・知識の低さやばらつき」、「給食センターと学校との距離」、「自信を持って給食を提供できなかったとき」、「衛生管理の厳格さ」、「給食費の計算があわないこと」、「自分に学校教育や学校経営の知識が足りないこと」、「校長の給食や食指導に関する関心・知識の低さやばらつき」、「給食センター長の給食や食指導に関する関心・知識の低さやばらつき」、「場所や上司により仕事内容や仕事量が違うこと」、「子どもの実態がわからない状態で食指導をすること」などが指摘された。こうした指摘の詳細は、既にこれまで紹介してきたものと似ている部分が多いので、ここでは「給食センターと学校との距離」について論じることとする。

今回の調査協力者 86 名のうち、勤務場所が「学校」と答えた人は 47 名（54. 7%）、「共同調理場」と答えた人が 37 名（43. 0%）であった。選択肢を設けなかったが、残りの人は教育委員会勤務であると思われる。また、後に学校栄養職員に教わったが、「共同調理場」といっても校舎内に設置されている共同調理場と、離れた場所にある共同調理場では職務実態・意識が相当に違うらしい。おそらく、できれば単独校に勤務したいという学校栄養職員の方が多いと思われる。以下に紹介しているように共同調理場（給食センター）の場合には、学校や子どもとの距離があり、単独配置校にも増して、学校栄養職員の立場が微妙で孤独感を感じることも多い⁽¹⁶⁾。「単独校に勤務してはじめて学校のことがわかりました」という学校栄養職員の言葉に表れているように、子どもの実態や学校教育、学校経営に関する知識・情報格差も大きい。また、そうした個人の意欲や力量を超えた条件面での違いが、給食の在り方や食に関する指導の在り方に違いを生み出していることも報告されている⁽¹⁷⁾。

こうした共同調理場に勤務する学校栄養職員の置かれた状況を克服する上では、一人ひとりの努力も大切だが、県教育委員会の指導や管理職の学校給食、学校栄養職員に関する研修（例えば新任教頭研修会

などで学校栄養職員自身が講師となり説明すればよいと思う)も必要だろう。さらに、学校給食や学校栄養職員について現在の管理職はほとんど知らない(例えば、栄養士と調理師の専門性や立場が違うといった初歩的なことも知らない管理職もいると思う)という前提に立って栄養士組織を更に強化しパンフレットを作成するなど情報を発信していくことが必要だろう。

(給食センターと学校との距離)

- ・ 給食センターにいる時は所属学校との距離。学校へ行くのは入学式と卒業式、給食時の訪問クラス1回ずつで先生方との交流がまったくはかれなかった。担任の先生が子どもと同じように給食の献立の好き嫌いで文句を言ってきた時や給食をあきらかにしっかりくばっていないまま返ってくる残菜を見る時、給食指導をどのように考えているのかと思ってしまう
- ・ 自分の立場、身分が学校に籍がありながら、給食センター勤務であることによりどちらの職員でもない不安定な存在ということ。さらに一般に給食センターの所長が栄養士や給食について理解がない人が多いこと。(幸い私はいい上司に恵まれてきましたが)
- ・ いくつも配食校があるとしょっちゅう授業時間に合わせて学校を訪問するのですが、先に文書で知らせてあっても中々伝わっていなかったり、始まる前に着いたりすると持つ場所もなく外で待たされたりといやな思いをしたことがあります。
- ・ 学校栄養職員として所属校はあるのですが、センター勤務で学校の様子活動など、週報や行事内容のプリントに目を通してはいるが、その場にはいないので学校の動きが良くわからない。また、受配校(給食を提供している所属校以外の学校)に給食訪問で回っているが、担当学校であるがお客様扱いであることが多く、なかなか人間関係が築きにくい。赴任した町(給食の設置者が市町村であるため)の影響がかなり職場に影響を与えるため、行くところによって仕事がまったく違う。

4. 学校栄養職員が教育活動を行う上での課題

栄養教諭にならなくても、既に学校栄養職員は多くの機会での指導を行っている。指摘するまでもなく、給食そのものが「生きた教材」であり、そうした教材を通して毎日、学校栄養職員は子どもたちにメッセージを送っている。その他にも、さまざまな教科や学級活動、給食時間の校内放送や教室訪問、委員会活動や肥満児個別相談、学校保健委員会講話など多くの教育活動に取り組んでいる。こうした教育活動を学校栄養職員が行う上での課題にはどのようなものがあるだろうか。

われわれは「教育活動を行う上で、難しかったこと、苦勞したこと等の内、最も印象的だったことについて下記の空欄に自由にご記入ください」という質問を行った。その結果、指摘が多かったものとして「担当の教師と十分な打ち合わせができなかったこと」、「教材研究・指導案を作ることが難しい」、「子どもの実態を把握することが難しい」、「そもそも食に関する指導の時間を確保してもらうことが難しい」、「教育にどこまで踏み込んで良いのか曖昧」、「給食業務と指導との両立の難しさ」、「教師の学校給食や食に関する指導の理解・協力を確保すること」⁽¹⁸⁾などが挙げられる。この他には、「指導の対象者の発達段階に合わせた授業をすること」、「子どもの発言に臨機応変に対応すること」、「教えるプロの前で授業をするため緊張すること」、「保護者の参加を増やすこと」、「落ち着かない子どもへの対応」、「多くの子どもを動かすことの難しさ」、「他の人の授業を見たことがない」などが指摘された。

指摘が多かったものを再度見てみればわかるように、例えば「そもそも食に関する指導の時間を確保してもらうことが難しい」「教師の学校給食や食に関する指導の理解を確保すること」といった指摘のように教育活動そのものというよりも、その前提を創り上げるところで既に学校栄養職員が苦勞しているこ

とがよくわかる。教師よりも難しい条件で教育活動を行っているとも言える。平成14年度からの栄養士養成施設のカリキュラムには専門科目として「栄養教育論」⁽¹⁹⁾が設けられている。筆者はそうした「栄養教育論」のテキストを読んで見たが、以上のような教育活動の前提条件を創ることの難しさや、その技については言及されていなかった。また、「給食業務と指導との両立の難しさ」も近年さらに難しさを増しているらしい。というのは、調理員のパート化が進み責任感や力量が低下しているからだという。そうした条件のもとで給食業務と指導との両立を図ることは難しいことも確かである。校長や給食センター長はこうした条件を踏まえて、学校栄養職員を指導しなければならない。

(教師と十分な打ち合わせができなかったこと)

- ・ 1年生で「朝食について話して下さい」と45分間ボンと時間をもらった時。もっと担任と打ち合わせをしておくべきでした。内容も1年生にはわかりずらかったようです。
- ・ 家庭科でのTT初めてということもあったが、担当の先生とほとんど打ち合わせもなく教える内容や資料などが不足していてうまくいかなかったこと。子どもの様子や求めていることもわからなかった。
- ・ TT授業を行うにあたり、なかなか担任と打ち合わせする時間がとれません。「この日にこの事について話をしてください」といわれることがあります。授業の前後がわからないまま児童の前に立つことができました。とても不安になりました。担任が求めている授業になったのか、子どもに何を育てたかったのか授業を行うたびに悩みます。

(教材研究・指導案を作ることが難しい)

- ・ 授業などで子供に伝えたいことなど一人で指導案も作れないし計画もできない。なにしろ教育課程の位置づけがはっきりしていないので栄養指導は難しい。
- ・ 授業については指導案の作成…自分の思いを定められた様式に明確に表現することの難しさがわかった。授業の進め方…指導案に沿った流れの中で子どもの意見を取り入れながら目標に向けて指導していく難しさ。
- ・ 苦労したことは、媒体の工夫、どのように話したら言いたいことが伝わるかと考えたこと。

(子どもの実態を把握することが難しい)

- ・ 共同調理場勤務のためいろいろな学校の授業に参加することになるが、打ち合わせの時間も少なく、また学校により生徒の実態が違うので対応が難しい。現在、市内全校で食育の研究に取り組んでいるため、モデル指導案をもとに各校で授業に取り組んでいるが同じ内容でも授業内容は学校・先生により差があるので一緒に授業をやるにしても対応が難しい。
- ・ 子供の実態が良くわからない学校での、食に関する指導。
- ・ 年間約180回の給食の中で、58クラスを回るので、ほぼ週3回のペースで給食訪問を行っても、年1～2回程度しかクラスに入ることが出来なく、その時間に無理に栄養指導を行っているのでは、話をしてくるだけで、もっとも大切である対象者理解までいたっていない。今後もっと方法を考えていくべき。TT授業をお願いすると、何でも良いのでおまかせということが多い。または先生によっては資料提供のみとか、人間関係も含めてとても難しいことが多い。

(そもそも食に関する指導の時間を確保してもらうことが難しい)

- ・ 中学校で指導を行う時に学級活動等の時間を食の指導にあててもらうこと。指導しなければならない

いことはたくさんあるのに時間の余裕がないところへ食についての指導を入れてもらうのはとても大変のようだった。

- ・指導計画が明確に位置づけられていないため、自分から教師に「やらせてください」と話をもちかけて実施してきたがあまり期待されず、日程をなかなか決めてもらえなかった時、難しさを感じた。
- ・リザーブ給食は初めて取り入れたので、まず先生方に説明するのが大変でした。子どもたちの方がかえって飲みこみが早かったです。

(教育にどこまで踏み込んで良いのか曖昧)

- ・大体のものは一人で行うわけではないので教わりながらやりました。全体的にはどこまで踏み込んで話をしたら良いかわからず困ったことが多かったように思います。
- ・T Tの授業は担当教師との打ち合わせに苦勞する。時間配分、教師と栄養士の伝えたい内容の違い、前・後の授業がよくわからないこと。
- ・あくまで教諭の考え方…。もう少し中身について栄養学的な、食の専門家としての参加方法ができたと思うが主導が教師のため難しい。

(給食業務と指導との両立の難しさ)

- ・学校にいるのだから会議や行事に係わりたい！と思うが、栄養職員の仕事（提出期限のある注文書など）をどうしてもやらなくてはいけないとき悩みます。結局注文書や献立作成など栄養職員しか出来ない内容のものは、自分しかできず誰も手助けしてもらえないので、残業や家に持ち帰ってやるが多かったです。
- ・T T授業を行う上で先生方と相談、打ち合わせができる時間が少ないところに困難を感じた。配送校など所属校でないところはなおさら感じる。給食業務と授業との両立が大変。栄養士が不在だと衛生的な面で気をゆるませる調理員がいる。どんな指導をするか一から考えなければならない。教材作りも。しかし、一から作っていくことで児童の反応が良かったときはかなりの達成感を得られるのでうれしくもある。
- ・T Tに入る予定を組んである日に調理師さんが休んでしまい、現場を離れることができなくなってしまったこと。

(教師の学校給食や食に関する指導の理解・協力を確保すること)

- ・学級訪問をはじめた頃は担任の先生に嫌な顔をされたり、何しにきたのとはっきりおっしゃる方もいました。現在も中にはそのような方もいます。でも、給食センターの人間関係よりずっと楽です。この程度のことはまったく苦勞ではありません。
- ・教室訪問は歓迎してくれる先生と迷惑そうな先生がいてクラスによって入りやすかったり、入りにくかったりがある。

終わりに

本調査により、学校栄養職員が栄養士として働きたいという〔栄養士志向〕を根底にしつつ、「学校給食に強い思い入れがあったから」、「教師、学校、子どもが好きだから」、「学生の時の栄養士実習での経験から」などの理由で職業選択を行っていること、栄養士という資格を有する学校栄養職員が、それぞれの置かれた状況のもとで専門性を発揮することを阻害されたり、立場の曖昧さに一人で耐えている状態、ある

いはそうした状況のもとで自らの位置を確かなものにしたり、専門性を発揮しようと努力している学校栄養職員の姿が鮮明に浮き彫りにされた。

「今まで疑問だったのですが、教職につかれる先生方は学校給食の目的、意義等、給食指導を含めた食育について学ばれているのでしょうか」。筆者が担当した栄養教諭の認定講習のレポートでこう問い掛けられ「はっ」とした。学校給食が学習指導要領で特別活動に位置付けている以上、大学の教職課程では特別活動論で教えられているはずではあるが、学校経営の研究ではほとんど学校栄養職員に関心が寄せられることはなかった。そうした学校栄養職員の姿に少しでも迫ることにより、学校経営研究者の責任の一端を果たせたと思う。

以上

-
- (1) 香川芳子「食に関する指導の充実と学校栄養職員の役割」『教職研修』352号、教育開発研究所、2001年。
 - (2) 栄養教諭の創設に関する経緯については、小川雅子「栄養教諭制度化に関する一考察」『日本女子大学大学院紀要』第10号、日本女子大学家政学研究科・人間生活学研究科、2004年に詳しい。
 - (3) 文部科学省「栄養教諭の創設に係る学校教育法等の一部を改正する法律等の施行について（通知）」2004年6月30日を参照。文部科学省のHPによると、平成17年度からの栄養教諭の配置は福井県10名、高知県5名、国立大学法人1名となっている。
 - (4) 家庭科教員を養成する教育学部家庭科教育担当の立場から、栄養教諭の創設について論じたものとして例えば、吉原崇恵「栄養教諭制度の創設についての一考察—家庭科教育担当の立場から—」『静岡大学教育学部研究紀要（教科教育学篇）』第35号、2004年がある。
 - (5) 浅見俊雄「栄養教諭制度の創設に当たって」『文部科学時報』1536号、2004年、10～11頁。
 - (6) 芝田進午『教育をになう人びと—学校教職員と現代民主主義—』青木書店、1980年、序文。
 - (7) 学校経営についての筆者の考えに関しては、藤原文雄「教育改革期における学校経営の課題」坂田仰・加藤崇英・藤原文雄・青木朋江編著『開かれた学校とこれからの教師の実践』学事出版、2003年。
 - (8) 静岡大学に赴任して6年の間に筆者が一貫して続けてきた研究は学校の教職員の職務実態や意識を調査し、彼・彼女に外部から見た視点をフィードバックするというものであった。筆者がこれまで着手してきた職種は学校事務職員と教頭であり、今回これに学校栄養職員が加わることになる。未だ公刊されていないものも多いが、公刊されているものに限定しても以下のようにかなりの数になった。藤原文雄・山崎準二「小・中学校事務職員の力量形成と専門性に関する研究（1）」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第8号、2002年、藤原文雄・山崎準二「小・中学校事務職員の力量形成と専門性に関する研究（2）」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）』第54号、2004年、藤原文雄「小・中学校事務職員の力量形成と専門性に関する研究（3）」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第10号、2004年、藤原文雄・山崎準二「高等学校事務職員の力量形成と専門性に関する研究（1）」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第9号、2003年、藤原文雄・山崎準二「高等学校事務職員の力量形成と専門性に関する研究（2）」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）』第55号、2005年、藤原文雄「学校事務の共同実施の可能性と課題」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）』第53号、2003年、藤原文雄「教頭職の職務と力量形成に関する研究（1）」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第11号、2005年。
 - (9) この通知によれば、学校栄養職員の職務内容は、学校給食に関する基本計画への参画、栄養管理、学校給食指導、衛生管理、検食等、物資管理、調査研究等となっている。静岡県の初任者研修に使用され

るテキスト『平成17年度 初任者研修資料』（静岡県教育委員会）でも、学校栄養職員について紹介しているが、そこでの職務内容は文部科学省の通知に「食に関する指導」を付け加えたものとなっている。

- (10) 藤沢和恵「学校給食における栄養士の役割（Ⅰ）－栄養士養成制度と食生活の社会化－」『中京女子大学紀要』第28号、1994年、118頁。われわれは、「あなたが学校栄養職員という仕事を選択した時期について下記の中から最も当てはまる番号を一つだけ選んで○をつけてください」という質問を行った。その結果は、1. 小学校の頃＝1名、2. 中学校の頃＝1名、3. 高校1・2年の頃＝6名、4. 高校3年の頃＝4名、5. 浪人の頃＝0名、6. 大学・短大・専門学校入学の頃＝10名、7. 大学・短大・専門学校卒業の頃＝42名、8. 他の職業についていた頃＝10名、9. その他＝12名であった。
- (11) 加戸守行「学校栄養職員の県費負担教職員制度への位置付け」『教育委員会月報』26（5）、1974年。
- (12) 山崎準二『教師のライフコース研究』（創風社、2002年）の「第5章：教職意識の構造」を参照のこと。
- (13) 今井千穂（中村美佐子監修）『栄養士・管理栄養士になろう』（インデックス・コミュニケーションズ、2004年）では、栄養士に向いている人として「①食べるのが好きな人」、「②人と接するのが好きな人」、「③「一生勉強」という気持ちがある人」、「④体力がある人」と説明している。
- (14) この職業上の転機という考え方については、前掲山崎準二『教師のライフコース研究』に負っている。
- (15) 学校栄養職員のやりがいについては、他に『学校給食』55巻8号（2004年）で特集が組まれている。
- (16) 学校栄養職員には県費負担と市町村費負担に区分されるが、校内での立場はそうした違いによっても微妙に違うらしい。県費負担の学校栄養職員の方が比較的、学校の教職員の仲間として認知されやすいという。
- (17) 安部テル子・谷上知佳「大分県小学校における学校給食指導－学校給食方式の違いによる給食指導の比較－」『大分県教育福祉科学部研究紀要』26巻2号、2004年を参照。
- (18) 担任の給食に対する考え方でそのクラスの残量も変わるという。子どもと向き合って食べていない、教室にいても自分の机で仕事をしている教師のクラスは残食が多く、マナーや片づけが悪いという。小学校教師と中学校教師の給食や食に関する指導についての考え方の違いについては藤沢和恵「学校給食における栄養士の役割（Ⅱ）－学校栄養職員の教育活動」『中京女子大学紀要』第29号、1995年を参照のこと。
- (19) 例えば、五十嵐桂葉編『栄養指導・教育論』中央法規、2004年。